

鍵盤を押すだけで音が出るピアノは、子どもからお年寄りまでさまざまな世代に愛され続けている楽器です。音は、オーケストラの楽器の音域をすべてカバーし、タッチによって色彩豊かな表現が楽しめます。そんなピアノもまもなく生誕 300 年を向かえようとしています。その魅力はどこにあるのでしょうか？
 今月は、“ピアノサウンドの魅力”をさまざまな角度からみていきたいと思います。



ピアノサウンドの 魅力

ピアノの魅力からピアノ音色の弾き方まで

The Piano Sound

ピアノの歴史

1726 年製のクリストフォリのピアノ（ライプツィヒ大学所蔵）の複製。
 1999 年 / 山本宣夫作、フォルテピアノヤマモトコレクション所蔵。



ピアノの歴史は、今から約 300 年前にチェンバロ製作家だったバルトロメオ・クリストフォリが 1709 年に試作した「クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ」という楽器がはじまりといわれています。この楽器は、外形はチェンバロを使い、内部はハンマーで弦を打つ仕組みでした。

クリストフォリによって作られた最古のピアノの鍵盤数は 54 鍵。改良が進むに連れて、鍵盤数も増え、作曲家にも影響を与えていきました。1780 年代に活躍したモーツァルトは、61 鍵のピアノを使っていました。この頃は、明るく美しい軽やかな音色だったといわれています。ピアノが急速に進化したのは、ベートーヴェンの時代です。彼は、その当時のピアノの性能や能力を超えるダイナミックな音楽表現を求めました。そのことがピアノ製作者の意欲をかき立て、ピアノの進歩をうながしたのです。彼のピアノソナタを見ればどんなピアノを使ったかがわかるといわれているのは、そのとき使っていたピアノの鍵盤（61 鍵→68 鍵→73 鍵）を目いっぱい使って作曲していたからです。

そして 19 世紀に入り、ダンパーペダル、フェルトハンマー、音域も 7 オクターブ（85 鍵）…と現在のピアノの機構がほぼ完成され、現在は鍵盤の寸法や沈み具合が変わり、88 鍵になるなどの部分的な改良にとどまっています。



豪華な装飾をほどこされた 18 世紀フランスのモデル、フレンチタイプチェンバロ。
 1992 年 / Ryo Yoshida 作、梅岡楽器サービス所蔵。



18～19 世紀にかけてヨーロッパの家庭に普及したスクエアピアノ。
 1812 年 / John Broadwood (London) 作、フォルテピアノヤマモトコレクション所蔵。

ショパンが好んだというプレイエルのフォルテピアノ。
 1846 年 / Ignace Pleyel (Paris) 作、フォルテピアノヤマモトコレクション所蔵。

